

はじめに

本書は「近代法思想史」の入門を意図した教科書です。その特徴は、全体の話の道筋を、日本の法学や法思想、法制史、政治史の展開に置いたことにあります。オーソドックスな法思想史の教科書なら、プラトン・アリストテレスといった古代ギリシャ哲学から始まって、中世・近世を経てカントやヘーゲルにいたる西欧法思想の流れを順番に追いかけることになるでしょう。もちろん現代の法哲学や法思想・法学にそれらが与えた影響は大きいし、現代に限らず、西欧法思想の影響を受けた日本の法思想を理解する上で、こうした流れを一度把握しておくことは重要です。

その一方で、法思想史の授業、とりわけ初年時生向けの授業を担当した筆者の経験では、なぜ日本で西欧の法思想の歴史を学ぶのかについて、必ずしもリアリティが感じられないという声も耳にしました。そこで本書のような構成を試みてみたわけです。日本の法学は、明治期以降のいわゆる西洋法の継受によってはじまったという事実があります。一方今日では改憲（解釈によるにせよ）や民法改正をめぐる動きや論争が盛んになっています。これらも含めて、新たな転換期になりうる現代の理論の背後にあるものを理解する上でも、日本の法思想がたどった道筋を見直してみることも重要です。その手がかりとなるためにも、一度幕末・明治以降の法思想と、それらが生まれた社会的・政治的背景、それに向かい合うためにどのような思想的素材を用いていったかを題材にしなが、法思想史に関心を抱いてもらえるような入門の教科書をつくってみることにしました。そのなかで継受された諸思想の流れにも最低限触れるようにしましたが、それはごく一部にとどまっています。

こうした継受をはじめとする問題には、すでに多くの優れた業績があります。本書もそれらに依拠しているところが多いのは事実で、ある意味では、それらの業績に対する道案内になることも目指しています。是非参考文献や原典にも挑戦してください。引用・参考文献は本文中や各章の最後に示しました

はじめに

が、それ以外にも重要な文献がたくさんあります。それらについては、法律文化社のHPに掲載させていただくことにしました（www.hou-bun.comにある「教科書関連情報」にて掲載）。執筆にあたりお世話になったという点では、どちらにも差はないのですが、一次文献と、読者にとってアプローチしやすい、また広い範囲をカバーしているものを各章末にあげることにしました。教科書の体裁もあり、参考にした文献・該当頁を個々に指摘できなかった点については、読者の方々のご不便をおかけするとともに、著者の方々には失礼をすることになりましたが、お許してください。

本書の構成は、おおむね時代を追っていますが、テーマの流れもあり、前後している場合もあります。執筆にあたっては誤解のないよう注意しましたが、念のため付け加えておきます。本書から参考文献に進み、さらにそこからより広い法思想の世界へと、読者の皆さんが関心を広げられることを著者一同願っています。それにより、最先端の思想の「新しさ」も知ることができるのではないかと考えています。

2016年1月

大野達司